

UTCP ワークショップ フランス現代思想

(主催：國分功一郎、宮崎裕助、西山雄二、郷原佳以)

County Line, Malibu, CA. photo: IMAGEBYSP



ドゥルーズ、レヴィナス、リオタール、ブルデュー、ブランショ、デリダ、リクール……この十年ほどのあいだに多くの現代フランスの思想家たちが他界した。仮に「フランス現代思想」を、サルトルの実存主義が失効した後で構造主義の台頭とともに登場した知的運動——狭義の哲学のみならず、文学、政治学、経済学、言語学、美学、文化人類学といった領域を横断しつつ展開される知的活動の総体——であるとするならば、その思想的潮流を担った多士済々のほとんどがもはやこの世にはいないことになる。

確かに、現在でもフランスの人文科学系の知的生産力は衰えてはいない。ジャン＝リュック・マリオンやジャン＝ルイ・クレティアンらの「神学的転回」を遂げたフランス現象学、ジャック・ブーヴレスによる英米系の分析・言語哲学、近年では政治哲学の探究に精力的に取り組むアラン・バディウ、ジャック・ランシエール、エチエンヌ・バリバル、そして、「新哲学者」らメディア知識人の活動。デリダの脱構築思想を継承する者にしても、「キリスト教の脱構築」に専心するジャン＝リュック・ナンシーは健在であるし、脳科学と哲学の接点を模索するカトリーヌ・マラブーや、技術哲学を探究するベルナル・スティグレールも独自の思想を展開している。

しかし、とりわけデリダ亡き後顕著なのだが、フランスの人文科学の知全体を見渡してみても、かつてのような思想的な大変動の予感が感じられるとはいえない。現在のフランスの人文科学が進展しているのも、先達たちが残した巨大な遺産を相続することによって、あるいは逆に、彼らの遺産を忘却しようとする態度によってであるように見える。

「フランス現代思想」なるものの時代はひとまず終わった——まずはじめに、この事実を確認しよう。ある時代に隆盛を極めた思想群が静かに消え去りつつあるとき、その吊鐘の響きはいかにして新生の予兆をもたらすのだろうか。本ワークショップは、「フランス現代思想」の終わりの始まりに身を置きつつ、その遺産相続をめぐって研究を進めていくことにする。二十世紀後半を通じて彩光を放った彼らの思想的営為を今一度批判的に検討し、そのなかから何を継承すべきなのかを考察することが本ワークショップの目途である。

日程 (詳細や変更はU T C PのHPを確認されたい)

第1回 10月23日(火) 18:00~20:00

「ジル・ドゥルーズと音楽」 リシャル・ピナスによる講演
東京大学駒場キャンパス18号館4階 コラボレーションルーム4

第2回 11月20日(火) 18:00~20:00 場所は未定

「ミシェル・フーコーの後で——コレージュ・ド・フランス講義録を中心に」
発表: 高桑和巳 コメント: 萱野稔人 司会: 小林康夫

第3回 12月(詳細未定)

「ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』をめぐって」
発表: 國分功一郎、宮崎裕助 コメント: 増田一夫(予定)